

GUODIAN RILYU WENFA JINGCUI

邹文◎编著

古典日语文法精粹



华中师范大学出版社

古典日语文法精粹

邹 文 编著

副主编：（以姓氏笔画为序）

邓 高 黎 刚

参编人员：（以姓氏笔画为序）

李 丹 李福兴 谷胜军

华中师范大学出版社

新出图证(鄂)字 10 号

图书在版编目(CIP)数据

古典日语文法精粹/邹文 编著. —武汉: 华中师范大学出版社, 2013. 6

ISBN 978-7-5622-6114-8

I. ①古… II. ①邹… III. ①日语—语法 IV. ①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 109191 号

古典日语文法精粹

© 邹 文 编著

责任编辑: 孙月红 周孔强 刘晓嘉

责任校对: 王 胜

封面设计: 罗明波

编辑室: 高校教材编辑室

电话: 027-67867364

出版发行: 华中师范大学出版社有限责任公司

社址: 湖北省武汉市洪山区珞喻路 152 号

电话: 027-67863426(发行部) 027-67861321(邮购)

传真: 027-67863291

网址: <http://www.ccnapress.com>

电子信箱: hscbs@public.wh.hb.cn

印刷: 武汉理工大印刷厂

督印: 章光琼

字数: 200 千字

开本: 710mm×1000mm 1/16

印张: 11.75

版次: 2013 年 6 月第 1 版

印次: 2013 年 6 月第 1 次印刷

印数: 1—1000

定价: 24.00 元

欢迎上网查询、购书

敬告读者: 欢迎举报盗版, 请打举报电话 027-67861321

前 言

人类在漫长的历史长河中留下了无数宝贵的文化遗产，这些宝贵的文化财富深深地影响着当今的我们，像一面镜子让我们审视今天、展望未来。了解和研究古代文化不仅具有重要的历史意义而且具有重要的现实意义。文化的载体是语言，语言随着时间不断地变化，因此，古代的语言和现代语言有很大的差异。日语和汉语一样在古代分为文言和口语，文言就是书面语言，口语是人们人日常交流的语言。日语文言文通常是指日本奈良时代到江户时代的语言，跨越了几个世纪。日本直到明治维新之后才提出文言和口语的统一。近代文学作品中有许多仍然采用的是文言文，一直到二战结束之前日本的很多政府公文都是采用的文言文。而且现代日语中仍然保留着文言的影子，现代日本文学作品和文献中常常会引经据典出现日本古典名篇的段落和句子。在我国的日语专业高年级教材中也选有日本古代作品。因此，学习古典日语语法对学习日本语言、文学、文化和研究日本历史都有着十分重要的作用。

本书根据教育部制定的日语专业高年级教学大纲要求和日语专业八级考试大纲要求，简明扼要地介绍古典日语语法基础知识，使学生借助工具书能够阅读一般性古典日语文献。为了让学生在有限的学时内掌握学习古典日语所必须的文法知识，本书突破传统编写体系，从简从易，略去了词类和句法的叙述，重点讲述用言、助动词、助词、敬语和常见的修辞手法。

为了便于学习者掌握所学知识，根据每个章节的内容，本着“由浅入深、由易到难”的原则，选编了大量的练习，并附有练习答案，以便学习者自学。

本书可作为日语专业高年级和研究生的教材和考研、专八的参考资料，同时也可供有一定日语基础的日语爱好者以及从事日语教学和翻译的人员参考。

本书在编写过程中得到了襄阳泽东化工集团有限公司董事长宋开荣先生和日本外教稻田昭二先生的大力支持和帮助，稻田昭二先生对全书进行了审校，在此表示感谢。

本书的出版与华中师范大学出版社的大力支持和热心指导分不开，在此表示衷心地感谢。

由于编者水平有限，难免有些错误和缺点，敬请广大读者批评指正。

邹 文

2013年6月

目 次

第一章 古典文法入門.....	(1)
第一節 古典語.....	(1)
第二節 仮名遣い.....	(2)
練習一.....	(4)
第二章 動詞.....	(6)
第一節 概説.....	(6)
第二節 四段活用動詞.....	(9)
練習二	(10)
第三節 上一段と上二段活用動詞	(11)
練習三	(13)
第四節 下一段と下二段活用動詞	(15)
練習四	(17)
第五節 カ行とサ行変格活用動詞	(18)
練習五	(20)
第六節 ナ行とラ行変格活用動詞	(21)
練習六	(22)
第七節 動詞の音便	(23)
練習七	(24)
第三章 形容詞・形容動詞	(25)
第一節 形容詞	(25)
練習八	(28)
第二節 形容動詞	(29)
練習九	(30)
第四章 助動詞	(32)
第一節 概説	(32)
第二節 過去助動詞「き けり」	(34)
練習十	(35)
第三節 完了助動詞「つ ぬ たり り」	(36)

練習十一		(39)
練習十二		(42)
第四節 推量助動詞「む むず らむ けむ べし べらなり らし めり まし」		(43)
練習十三		(46)
練習十四		(50)
練習十五		(53)
練習十六		(55)
練習十七		(57)
練習十八		(60)
第五節 打消しと打消し推量助動詞「ず じ まじ」		(61)
練習十九		(62)
練習二十		(66)
第六節 断定・伝聞・推定助動詞「なり たり なり」		(67)
練習二十一		(69)
練習二十二		(72)
第七節 受身・自発・可能・尊敬助動詞「る らる(ゆ、らゆ)」		(72)
練習二十三		(77)
第八節 使役助動詞「す さす しむ」		(79)
練習二十四		(83)
第九節 希望助動詞と比況助動詞「まほし たし ごとし」		(85)
練習二十五		(87)
第五章 助詞		(89)
第一節 概説		(89)
第二節 格助詞「が の を に へ と より から にて して」		(90)
練習二十六		(97)
第三節 接続助詞「ば とも ど ども が に を て して で つつ ながら ものの ものを ものから ものゆゑ」		(100)
練習二十七		(106)
第四節 係助詞「は も ぞ なむ や やは か かは こそ」		(109)

練習二十八	(113)
第五節 副助詞「すら だに さへ のみ ばかり まで など し しも」	(115)
練習二十九	(118)
第六節 終助詞、間投助詞「な(詠嘆) な(禁止) そ ばや なむ てしが てしがな にしが にしがな がな もがな か かな かし や よ を」	(120)
練習三十	(124)
第六章 敬語	(126)
第一節 概説	(126)
練習三十一	(129)
第二節 注意すべき敬語	(131)
練習三十二	(132)
第七章 修辞	(136)
練習三十三	(144)
第八章 古典実践	(146)
附1: 練習解答	(157)
附2: 古典実践解答と現代訳	(172)
主要参考书目	(181)

第一章 古典文法入門

第一節 古典語

一、古典語（文語）

日本では奈良時代ごろから江戸時代末期までの間に書かれた文学作品を中心とする優れた言語作品が古典と言われ、それらの言語作品に用いられている言葉は日本語の古典語と言われる。

その千年以上の間に、もちろん日本語の言葉はいろいろな点で変化しているが、その中で、優れた文学作品を多く生んだ平安時代中期の言葉は、その後の日常言語の変遷にもかかわらず、長い間文章を書く場合の模範、基準とされてきた。そこで、平安時代中期の言葉が、日本語の古典語の中心と見なされている。

明治時代からの言文一致が提唱されたが、福沢諭吉、尾崎紅葉、樋口一葉、森鷗外などの作品に用いられている言葉はやはり古典語である。さらに第二次世界大戦前までは特に公文書などで古典語が広く使われていた。

二、古典語（文語）と現代語（口語）

A 行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかた

は、かつ消え、かつ結びて、久しく止まりたる例なし。世の中にある人と栖とまたかくのごとし。

B 流れゆく川の水は絶えないのであるが、流れをなしている水は刻々と移り、もとの水ではない。流れの留まっているところに浮かぶ泡は、消えるものがあり、一方で生じるものもあるが、それでも長続きするものはないものだ。世に住む人間とその住居とはこのようなものである。

上のAの文章は鎌倉時代に書かれた『方丈記』の冒頭であり、Bの文章

はその現代語訳である。二つの文章を比べてみると、古典語と現代語との共通点、相違点の一端がうかがわれる。

三、古典語の文法

人間は、自分の考えや感情を、言葉によって人に伝えようとするが、それが可能なのは言葉の表す意味や、言葉の並び方などについてその言葉を用いる人々の間に約束があるためである。その約束——言葉の決まり——を文法という。

現代日本人は現代日本語の文法に基づいて言葉を用いているが、古代は古典語の文法によって言葉を用いていた。日本の古典は日本人だけでなく全人類にとっても貴重な文化遺産であり、それを正しく理解するためには、日本語の古典の文法を学ばなければならないのである。

第二節 仮名遣い

古典文と現代文との相違点の一つに、仮名遣いの問題がある。例文 A で見たような平安時代に完成された仮名遣いを「歴史的仮名遣い」と呼び、現代用いている、発音どおりの表記を原則とする仮名遣いを、「現代仮名遣い」と呼ぶ。仮名遣いの相違は時代による発音の違いから生まれたものである。特に文法では活用する語の活用の行などに関係するから、文法の第一歩として、歴史仮名遣いになれることが大切である。五十音図の中で、現代では用いられない仮名も歴史仮名遣いではよく用いられる。

1. 歴史仮名の「ゐ、ゑ、を」を「い、え、お」と読む

例えば：藍（あゐ）	あい
居る（ゐる）	いる
声（こゑ）	こえ
梢（こずゑ）	こずえ
十（とを）	とお
青い（あをい）	あおい

2. 「は」行仮名 言葉の最初の音でないとき「わ」行で読む。すなわち「わ、い、う、え、お」と読む。

例えば：川（かは）	かわ
鯛（たひ）	たい

危い (あやふい)	あやうい
前 (まへ)	まえ
多い (おほい)	おおい

例外:

- (1) 助詞「は」「へ」は変わらない。
 (2) 「ふ」はア段仮名の後ろで「お」と読む。「や」は別。

例えば: 葵 (あふい) あおい

仰ぐ (あふぐ)	あおぐ
倒れる (たふれる)	たおれる

- (3) 「母」は「はは」で 家鴨は「あひる」である。
 (4) 合成語は変わらない。

例えば: 初花 (はつはな)

綱引 (つなひき)
雨降り (あめふり)
縞蛇 (しまへび)

3. 促音 歴史仮名「か」「た」「ぱ」行の前の「く」「き」「つ」は読むとき促音化。

例えば: 足下 (そくか) そっか

石火 (せきくわ)	せっか
説経 (せつきやう)	せっきよう
仏法 (ぶつぼう)	ぶっぼう

4. 歴史仮名の「くわ」「ぐわ」は「か」「が」と読む

例えば: 菓子 (くわし) かし

左官 (さくわん)	さかん
画讃 (ぐわさん)	がさん
月忌 (ぐわつき)	がつき

5. 歴史仮名の「ぢ」「づ」は「じ」「ず」の読み方が同じである。

例えば: 藤 (ふぢ) ふじ

地頭 (ぢとう)	じとう
水 (みづ)	みず
先づ (まづ)	まず

6. 歴史仮名の拗音は大きな「や」「ゆ」「よ」で表記する。

例えば: じゃ じゅ じよ

じゃ じゅ じょ

7. 歴史仮名の撥音「ん」は時に「む」で表記する。

例えば：造（みやつこ）となむ みやつことなん
つねならむ つねならん

8. 長音

(1) ア段仮名＋「ふ」「う」、オ段の長音になる。

例えば：扇（あふぎ） おうぎ
鸚鵡（あうむ） おうむ
斯う（かう） こう
申す（まうす） もうす
漸く（やうやく） ようやく

例外：「は」行の四段動詞の語幹の最後の仮名はア段の仮名である場合。

例えば：会ふ 「あう」と読む。「おう」とは読まない。
使ふ 「つかう」と読む。「つこう」とは読まない。
仕舞ふ 「しまう」で「しもう」とは読まない。

(2) イ段仮名＋「ふ」「う」、「ゆ」の長音になる

例えば：幽閑（いうかん） ゆうかん
急所（きふしよ） きゅうしょ
入滅（にふめつ） にゅうめつ
昼夜（ちうや） ちゅうや

(3) エ段仮名＋「ふ」「う」、「よ」の長音になる

例えば：要（えう） よう
消息（せうそく） しょうそく
蝶（てふ） ちょう

(4) オ段仮名＋「う」

現代語とかわらない。オ段の長音になる。

練習一

問1 次の語句を現代仮名遣いに直しなさい。

- | | |
|-------------|-----------------|
| 1. あふ | 2. ふみ |
| 3. とふ | 4. はし |
| 5. いへば（言へば） | 6. おもひしこと（思ひし事） |

-
- | | |
|----------------|-----------------|
| 7. かひに（買ひに） | 8. こはし |
| 9. にはかに | 10. かほつき |
| 11. すなはち | 12. 堪へかねて |
| 13. まひひめ | 14. つはもの |
| 15. うちこはす | 16. なほわろし |
| 17. 人に与ふる | 18. おもはざるなり |
| 19. 今やはじめて見候へば | 20. ありのままにいひければ |

第二章 動 詞

第一節 概 説

一、特徴と働き

自立語で終止形がウ段音で終わり（「あり」「をり」などの数語だけが「り」となる）、動作・作用・存在などを表す。述語、連体修飾語になる。連体形は時に主語、目的語になる。

例えば：（1）深き川を舟にて渡る。（『更級日記』） 述語

訳：舟で深い川を渡る。

（2）病を受くることが多くは心より受く。（『徒然草』）

連体修飾語

訳：病気になる時も、多くは心の悩みが原因である。

（3）歌ふは楽しい。 主語

訳：歌うことは楽しい。

（4）月の出づるを見たり。 目的語

訳：月が出るのを見た。

二、活用形

六つの活用形がある 未然形、連用形、終止形、連体形、已然形、命令形である。

1. 未然形：助動詞や助詞が接続して、推量、否定、希望、仮定条件などを表す。

例えば：雪降らず。 否定

訳：雪が降らない。

雪降らむ。 推量

訳：雪が降るだろう。

仮定

雪降らば行かず。

訳：雪が降れば、行かない。

2. 連用形：

A. 合成語を作る。

例えば：雪降り続く。

訳：雪が降り続く。

B. 文中を中止する

例えば：雪降り、風吹く。

訳：雪が降って、風が吹く。

C. 助動詞や助詞が接続して、過去、完了などを表す。

例えば：雪降りたり。

訳：雪が降った。

3. 終止形：

A. 文を終止する。

例えば：雪降る。

訳：雪が降る。

B. 後続「べし」「らむ」推量を表す。

例えば：雪降るべし。

訳：雪が降るだろう。

4. 連体形

A. 連体修飾語

例えば：雪降る日。

訳：雪が降る日。

B. 主語

例えば：雪降るいとおかし。

訳：雪が降るのはたいそう趣深い。

C. 目的語

例えば：雪の降るをながむ。

訳：雪が降るのをぼんやりと見る。

D. 助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」の結びとなって、文を終止する。

例えば：雪ぞ降る。

訳：雪が降る。

5. 已然形

A. 助詞「ど」「ども」「ば」が接続して、順接や逆接の確定条件を

表す。

例えば：雪降れども、行く。

訳：雪が降っても、行く。

B. 「こそ」が接続して文を終止する。

例えば：雪こそ降れ。

訳：雪が降る。

6. 命令形

A. 命令の意味を表して、文を終止する。

例えば：はや舟に乗れ。（『伊勢物語』）

訳：早く舟に乗れ。

B. 四段動詞の命令形（已然形）は助動詞「り」が接続して、存続の意を表す。

例えば：若草の妻もこもれり我もこもれり。（『古今集』）

訳：若草のような妻もこもっているし私もこもっている。

三、活用の種類

古典語の動詞をその活用の仕方から分類すると、九種類になる。

四段活用	言ふ	書く
ナ行変格活用	死ぬ	往ぬ（二語）
ラ行変格活用	あり	をり（など四語）
下一段活用	蹴る	（一語）
下二段活用	求む	開く 投ぐ
上一段活用	見る	着る 煮る（など十数語）
上二段活用	生く	起く 満つ
カ行変格活用	来	
サ行変格活用	為	（す）

動詞活用表

活用	例	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段	思ふ	おも	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ナ変	死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ変	あり	あ	ら	り	り	る	れ	れ
下一段	蹴る	け	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下二段	掛く	か	け	け	くる	くれ	けよ	けよ

続 表

活用	例	語 幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
上一段	見る	み	み	み	みる	みる	みれ	みよ
上二段	過ぐ	す	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
カ変	来	く	こ	き	く	くる	くれ	こ・こよ
サ変	す	す	せ	し	す	する	すれ	せ・せよ

第二節 四段活用動詞

四段活用動詞は「あいうえ」四段に活用する。古典の中で、出現頻度が高く、現代語の五段動詞とほとんど同じ活用をするのが四段活用である。

四段動詞活用表

基本形	語 幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
書く	か	か	き	く	く	け	け
泳ぐ	およ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
貸す	か	さ	し	す	す	せ	せ
打つ	う	た	ち	つ	つ	て	て
買ふ	か	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
飛ぶ	と	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
読む	よ	ま	み	む	む	め	め
乗る	の	ら	り	る	る	れ	れ
下に来る主な語		ず、む	たり、て	言い切る	こと、もの	ど、ども、り	

- 例えば：(1) 身の全く久しからんことをば思はず。(『徒然草』) 未然形
訳：自分の身が安全で長く続くことを考えない。
- (2) 身を惜しとも思ひたらず。(『徒然草』) 連用形
訳：自分の身を惜しいとも思っていないで。
- (3) 男はこの女をこそ得めと思ふ。(『竹取物語』) 終止形
訳：男はこの女を妻にしようと思う。
- (4) 京に思ふ人なきにしもあらず。(『伊勢物語』) 連体形
訳：都に恋しく思う人がいないわけではない。
- (5) 後にはさはさはと張りかへんと思へども。(『徒然草』) 已然形
訳：後にはさっぱりと張り替えようと思うけれども。

(6) この一矢に定むべしと思へ。(『徒然草』)

命令形

訳：この一本の矢で決めようと思え。

注意：「飽く」「足る」「借る」「生く」は、古語では四段活用である。

口語との比較：

A. 口語は五段に活用する、文語は四段に活用する「ある」「死ぬ」「蹴る」のほかに口語の五段活用は文語でほとんど四段活用である。

B. 現代語のア・ワ行五段活用動詞は古典語ではすべてハ行四段活用をする。

練習二

問1 動詞「鳴く」「取る」を適当に変化させて、_____に入れよ。

- (1) 鳥、_____ず。 竹を_____ず。
 (2) 鳥、_____たり。 竹を_____たり。
 (3) 鳥、_____。 竹を_____。(普通の言い切りで)
 (4) 鳥、_____とき、 竹を_____とき、
 (5) 鳥、_____ども、 竹を_____ども、
 (6) 鳥よ、_____。 竹を_____。(命令する言い方で)

問2 前問の(1)～(6)の活用形名を記せ。

問3 動詞「鳴く」「取る」の活用表を完成せよ。

語例	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
鳴く	鳴						
取る	取						

問4 文中より動詞を抜き出し、言い切りの形(終止形)も示せ。

- (1) その沢に、かきつばたいとおもしろく咲きたり。(『伊勢物語』)
 (2) かぐや姫、「しばし待て」と言ふ。(『竹取物語』)
 (3) 野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。
 (『竹取物語』)

問5 _____線の四段活用の動詞は、何行に活用するか。

- (1) 舟こぞりて泣きにけり。(『伊勢物語』)
 (2) 乗りて渡らむとするに、(『伊勢物語』)
 (3) 旅の心を詠め、と言ひければ、(『伊勢物語』)

問6 動詞「思ふ」を、指示された活用形に直せ。

- (1) たとしへなきもの、(思ふ・連体形)人と憎む人と。(『枕草子』)
 (2) 限りなくかなしと(思ふ・連用形)て、(『伊勢物語』)